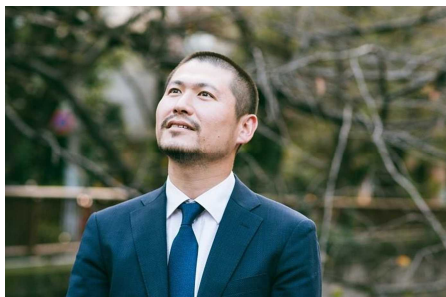


ソーレでは、内閣府による「女性に対する暴力をなくす運動」期間（毎年11月12日～25日）に合わせ、DV防止啓発講演会を行っています。今年度は齊藤章佳さんをお招きし、加害者臨床から見てきた無意識なとらわれや思い込みが及ぼす影響についてお話いただきました。この講演会は、サテライト会場の香南市でもライブ視聴されました。

令和5年度DV防止啓発講演会 加害者がとられる「男らしさの病」とは



日時：令和5年11月18日（土）13：30～15：30
会場：こうち男女共同参画センター「ソーレ」大会議室
〔オンデマンド配信 11月24日（金）～12月7日（木）〕

講師 さいとう あきよし
齊藤 章佳さん

（大船榎本クリニック精神保健福祉部長/精神保健福祉士、社会福祉士）

《講師プロフィール》

大学卒業後、アジア最大規模といわれる依存症施設でソーシャルワーカーとして、約20年に渡りアルコール依存症を中心にギャンブル・薬物・摂食障害・性犯罪・児童虐待・DV・クレプトマニアなど様々なアディクション問題に携わる。専門は加害者臨床で現在まで2500名以上の性犯罪者の治療に関わる。また、都内更生保護施設では長年「酒害・薬害教育プログラム」の講師をつとめている。小中学校では薬物乱用防止教育をはじめ、大学でも早期の依存症教育に積極的に取り組んでいる。東京都痴漢被害実態把握調査委員、一般社団法人痴漢抑止活動センターアドバイザー。

.....

誰もが持っている加害者性

自分の中にある自己肯定感の低さや自尊感情を回復するために人間が比較的選択しやすい行動が加害行為である。追い詰められた時、自分よりも弱い存在を支配し加害をすることで、自信を取り戻したり、自己肯定感を上げるといった特性がある。加害者性は男性だけでなく女性も含めて人間が共通して持っているものであり、多くの人は対話を重ね相手と共感しながら、その加害者性を制御しており、それをできる人が成熟した大人ではないかと私は思う。この加害者性（＝支配欲）は、男らしさのキーワードでもあり、自分の中にある加害者性と向き合いセルフトークしていくことが加害者臨床※1ではとても重要になってくる。

性犯罪・性暴力が奪うもの

私の関わったケースの中に、ある男子高校生がスマホで盗撮をして捕まるという事例があった。盗撮のきっかけはいわゆる「スクールカースト」上位の同級生から、女子生徒の後ろ姿の盗撮を頼まれたことだった。彼が断り切れずに盗撮した写真はグループラインで共有され、「勇気がある」「すごい」とコメントが付き、「男として認められた感じがした」と彼は話した。彼らの世代で「男らしさ」はもう価値のないものだと思っていたが、「力を持っている男からの承認」ということにまだ一定の価値があり、その盗撮画像によって男同士の絆が強化されるという、大人社会と同じ現象がそこにあることに気づかされた。

今度の性犯罪刑法改正で撮影罪が新設されたが、無断で他者を撮影するという行為は盗撮行為であるにもかかわらず、この暴力性について誰も教えてはくれない。撮影する時は必ず相手の同意が必要であり、これは性的同意とも繋がっている。

加害行為の裏で被害者は、「無断で盗撮された私には価値がないのだろうか」と自尊心を奪われていく。性暴力は、被害者の安全に対する感覚と自己肯定感や自尊心を奪っていくのだ。

男らしさと男尊女卑依存症社会

加害者はなぜ、暴力を振るうのか。多くは自分よりも弱いと認識した対象に対して加害をしている。これは一体なぜか。日本は男尊女卑依存症社会※2である。男性の依存症の人たちはワーカホリックがほとんどで、男社会の競争の中で痛みを感じながらも会社組織に捧げた生活をしてきた。私は自分の痛み鈍感なジェンダーが男性だと思う。男性は仕事にのめり込むことで痛みを紛らわし、酒に耽溺し、ギャンブルにはまり、薬物を使う者もいる。自分の痛みを感じないように生きているからこそ、他者の痛みも感じるができない。これは男性優位の社会にある男らしさの教育の中で、脈々と受け継がれてきたことではないだろうか。

この男尊女卑の価値観がどこで最初にインストールされるのかと考えると、いきつくのが家庭である。子どもの頃から家庭の中で植え付けられた「女はこうあるべき、男はこうあるべき」という教えは、男尊女卑の種として学校で芽を出し、メディアから水を与えられ、大学を卒業する頃には社会によって花開く。同性の親から刷り込まれる「女（男）はこうあるべき、女（男）だから」といったジェンダーバイアスに親たちも自覚的になるべきだ。

私が望んで学んだわけでもないこの価値観は、子ども時代に刷り込まれ、私自身の根っこを支えており、今でも加害者臨床の中で顔を出すことがある。加害者の女性蔑視の発言を聞いて、なぜか自分もその価値観が「分かる」と賛同している。男尊女卑は、日本社会の根底にある価値観なのだ。加害者臨床に携わる中で、この負の連鎖はここで止めようと思った。

性犯罪・性暴力は学習された行動

社会には「男は性欲がコントロールできない生き物だ」という価値観が根強く存在しているが、これは権力を持っている男性側に都合のいい価値観であり、この価値観に絡め取られている女性も同じで「男ってそういうもの」と思っている人は多い。だが加害者臨床で出会う加害経験者は性欲のためとはほとんど言わない。「男は性欲がコントロールできる生き物だ」という価値観を上書きし、性暴力を性欲の問題に矮小化することをやめようと言いたい。加害者には認知の歪みがあり、その本質には共通する価値観「いやよいよよも、好きのうち」がある。英語で言うと「No means Yes」。最初は嫌がっていても、無理やりすれば好きになるのではないかという価値観。私は目の前にいる加害者は日本社会の縮図だと思う。性暴力は「学習された行動」であり、「学習し直す」ことができる。新しい価値観を取り入れ、古い価値観をアンインストールする。このアップデートの繰り返しが治療の肝でもある。

性犯罪・性暴力への認識をアップデートする

加害者の治療プログラムには①再発防止、②薬物療法、③性加害行為に責任を取る、この三本柱にプラスして包括的性教育がある。加害者には性教育の教科書やしっかりとした学びがなかった。意外かもしれないが、学び直しをしたいという要望が加害者側から出たのだ。小中高生の性教育にもDVや性暴力のカリキュラムをぜひ取り入れて欲しいと思う。性暴力には被害者と加害者だけでなく、周囲には第三の傍観者、バイスタンダーがいる。このバイスタンダーの意識が変わりアクティブバイスタンダーになることで、問題が解決に向かっていく可能性がある。「大丈夫？」と被害者に声をかけるだけでもいい。加害行為に気づいていながら声を上げないことは、加害行為に加担していることにもなりかねないのではないか。そういう認識が広がれば、第三者の行動が変わっていくのではないかと私は思う。

※1 **加害者臨床**…加害者を行動変容させる為のプログラムや教育、加害行為の責任制を扱う臨床のこと。加害者は支援やケアされる存在ではなく、第一義的に被害者に責任を取るべき存在であり、加害に向き合い、責任を取れるようにすることが、加害者臨床の役割。

※2 **男尊女卑依存症社会**…男尊女卑の価値観に過剰適応し、その価値観で生きるのは苦しいのにも関わらず、それがやめられない状態。広義の意味では男らしさ女らしさという社会から期待されたジェンダー規範にとらわれ、それが手放せない状態。